

イングラムコレクションの愉しみ

平成 23 年 10 月 8 日

講師：神宮輝夫

神宮輝夫でございます。よろしくお願
いたします。

イングラムコレクションは非常に大きな
コレクションですから、皆さん、本当にい
ろいろな形でお使いになるとよろしいかと
思います。19 世紀のイギリスの児童文学の
主要な部分がほとんどそろっているコレク
ションではないかと思えます。それをここ
で見られるというのは、非常に、幸せなこ
とだと考えます。というのは、私が子ども
の文学の研究を始めましたのは 1970 年代
の初めからだったと思いますが、その当時、
子どもの文学、殊にイギリスやアメリカな
ど、海外の児童文学を研究するというこ
とになりますと、一応、簡単な形の文学史の
ようなものがあるのですが、それは読めて
も、ほとんどの作品が日本にないのですね。
翻訳があるものもありましたが、向こうで
は大変評判であった作品や 19 世紀の最盛
期に出た作品はなかったため、そういう研
究をする人たちは、例えばわざわざイギリ
スに行って、イギリスの図書館で読む、そ
れから、古本屋さんを回って本を買うとい
った、ある程度費用がかかる作業が必要で
した。しかし今は、例えば国際子ども図書
館へ来れば、コレクションの中の本はほと
んど読むことができます。こんなに結構な
ことはないので、大いに活用なさることだ
と思えます。イギリスへ行けばもちろん今
も読めますし、それから古本屋さんに行け

ば本もありますが、何年前くらいでしたか、
古本が高くなってしまったことがあるので
す。「どうして？」と聞くと、アメリカ人と
日本人が買うから高くなったと皮肉を言わ
れたことがありました。確かに相対的には
高くなっていますね。

小説のはじまり

いずれにしても、子どもの本、大人の本
に関わらず、文学というものは、とても古
くからあるもので、「神話」、「伝説」、「昔話」
などから始まっています。もちろん「神話」
は、人間が神を語る物語です。ですから、
主人公は神様でした。それから、その次の
「伝説」というのは、地方伝説や何かと分
類すれば厄介ですが、大体、英雄伝説のよ
うなものが多かったのです。そして英雄伝
説は、ほとんど皆、半分神様で半分人間、
半神半人のキャラクターを扱っていました。
これは人間を語るのではなくて、神に近い
ような、スーパーナチュラル
(supernatural) な力を持ち、そうした力
を発揮し、様々なことをしてくれた、要す
るに巨人たちですね、そういう人たちの話
でした。

人間は昔話で神を語り、伝説で英雄を語
り、次には、人間を語り始めました。そこ
から、小説などというものも始まりました。
伝説や何かではなくて、人間が人間につい
て語り始めるとしたら、そこには人間が、

描かれるものとして存在しなければならないわけでは、そして、自分たちと同じような普通の人間、あるいは自分たちよりも少し力があるような人間たちが、何をして、何を考えていたか、そうしたことを語り始めたのが、小説だと思います。

ですから、文学の歴史を見ますと、現在でもそうですが、詩が最高位にあります。その次にドラマ (drama)。そして、小説は一番新しい文学の形式ですから最下位に置かれる。そういう順番になっています。大体、世界的にそうなのだと思います。神様の話、英雄の話、それから人間の話ということになるわけです。人間が人間を語り始めたというのは、人間が人間というものを認識し始めたということだと思います。人間が自分の力を信じ始め、そして自分たちの言葉で自分たちのことを語り始める、これはやはり人間の一つの進歩になるわけですね。

歴史的には、子どもという存在が認識され始めたのは随分と遅くて、16世紀くらいだと言われます。日本はもっと早いです。なぜそういうふうになっていくかというと、その頃から例えば産業の一分野の工業は、様々な仕事が進んで専門化していき、生産力が上がっていく中で、今まで家の中で一家のある部分を支えていた子どもの労働もだんだん専門化していき、子どもの手から離れていく。そうすると、子どもが暇になる。あるいは、子どもを教育的にしつけていかないと、大人になってから職業に就けなくなる。そのようなことで、どうしても子どもに教育を与えなければならないというようになりました。

産業というものが少しずつ盛んになって

いき、それがやがて人間の生活を支配していく産業革命の時期になって初めて、人間は人間について語り始め、そして子どもについて語り、書くようになったのです。要するに、小説が始まったというのは、そういう形で人間が人間を認識し始めたのは、人間の進歩の歴史の一つというふうに考えていけばよろしいのではないかと思います。それは大体16世紀の末から17世紀あたりのことで、イギリスやフランスなどで小説というものが書かれ始めた頃です。

しかし、人間が人間について語る作品は、神話や伝説が最盛であった時期でも書かれないことはなかったと思います。例えば、「ローマ人言行録」(13-4世紀頃)などという本がイギリスで出てきていますが、これを読みますと、ごくごく普通のローマの庶民が様々な生活をする中で逸話のようなものをまとめた話があります。そんなものも既にありました。それから、14世紀、今度はチョーサー (Geoffrey Chaucer) が、*The Canterbury tales* (『カンタベリー物語』) という話を書きました。あの中には童話と言えるようなものもあります。イギリスの各地から善男善女が集まって、カンタベリーの寺院に詣でるといって巡礼の旅の中で、ロンドンにある宿屋に集まった人たちが一人一人、話をしていくもので、24の話があります。これは庶民が一庶民だけではないのですが一自分について話をする、あるいは自分の知っているおとぎ話、昔話を紹介するものです。この辺りが、どうやら小説といわれるものの最初なのではないかと思います。一番有名なのは「バースの女房の話」(*The wife of Bath's tale*) で、今から見ても、ほとんどおとぎ話ではないか

と言われるような話です。ですから、前から少しずつ少しずつ、自分たちのことを自分たちの言葉で話したことはなかったわけではありませんが、だんだんにそうした努力が増えてくるのは、やはり 15 世紀、16 世紀になってからだと思います。

「悪漢小説」(ピカレスク・ノーベル)と子どもの文学

その後で、小説というものを非常に発達させ、そして、子どもの文学に影響を与えた文学というのがあります。悪党小説、あるいは悪漢小説と言われる、ピカレスク・ノーベル (picaresque novel) で、これがかなり大きな力を持っています。16 世紀、スペインで一人の無名な青年が書いた *La Vida de Lazarillo de Tormes* (『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』1554) という作品があります。これは、ラサリーリョという子どもが非常に力のある、言わば悪党になっていく話なのですが、このラサリーリョをお母さんが乞食に売り飛ばしてしまう。この乞食は大変なスーパーマンで、目が見えなくて、そして物もらいをして歩きながら、何をやらせても万能な、要するに不思議な登場人物なのです。彼が小さな子どもを母親から買い受けて最初にしたことは、その子どもに「石の上に耳をつけて、石の声を聞いてごらん」と言って、その子どもが石に耳をつけると、その上から別の石でガンと子どもを殴りつけるという、残酷なことをします。つまり、これは、まず第一番目に人を信じるなという教えになるわけです。そんなふうにして一人の子どもをスーパーマン的な悪党に育てていく話で、大変によく読まれた有名な話です。どうやら

この辺りが、いわゆるピカレスク・ノーベルの最初なのではないかと言われています。これはスペイン語で書かれた話で、イギリスの児童文学にはあまり直接的な関係はないのですが、この悪漢小説が子どもの文学に与えた影響は、一般的には児童文学史ではあまり言われませんが、非常に強くあるようです。

ダニエル・デフォー (Daniel Defoe) は、*The life and adventures of Robinson Crusoe* (『ロビンソン・クルーソー』1719 / 展示資料 No.36 / 請求記号 VZ1-330) を書いて大変有名になり、そして、この小説は子どもの文学の世界で、冒険小説の代表作、そしてお手本になっています。そして、その翌年 (1720 年) に彼は、*Captain Singleton* (『キャプテン・シングルトン』) という小説を書いています。これは、シングルトンという子どもが船に乗り、マダガスカル海辺に置き忘れられ、そして仲間を集めて一つのグループを作り、マダガスカルを横断するという冒険物語ですが、これも一種のピカレスク・ノーベル、悪漢小説と言われています。『ロビンソン・クルーソー』の翌年書かれているということですから、『ロビンソン・クルーソー』共々、彼が書いた悪漢小説は、やはり子どもに影響を与えているのではないのでしょうか。絶海の孤島で一人だけで暮らして、そこに社会を作り、やがて小さな島を国にしてしまうという、全く何も無いところから一つの国を作るまでのプロセスを書いた『ロビンソン・クルーソー』が冒険小説のお手本となると同時に、このシングルトンの話も、やはり冒険小説のお手本の一つになっていたであろうということが考えられます。

つまり、これらは、際立った力のある登場人物と、それから彼らにとっても大変な冒険と力を要する様々な出来事があり、それを克服していく過程で成長していくという話なのです。もちろん、これは悪漢小説や絶海の孤島の冒険小説ですから言葉が乱暴で、殊に悪漢小説というのは乱暴です。口語の中でも、特に乱暴な会話で話が進められていきます。そして読者も、おそらく教養が高いとはいえない、本がやっと読めるくらいの人たちであったろうと考えると、これらの特徴は、易しくて、はっきりと人物が頭の中に入って、それから筋を明瞭にたどることができて、そしてもう一つ、生きていく上のテーマがあるという、一種の物語パターンを皆持っていたということです。どうやら子どもの本と言わず、小説の始めには、このようなピカレスクな物語があって、それが大人の本と子どもの本と両方に影響を与えていったのではないかと、というふうに考えてよいのではないかと思います。

そして、一般にイギリスの小説、殊に冒険小説などには記憶に残るキャラクターが登場します。代表的なキャラクターは、何と言っても *Treasure Island* (『宝島』 1883 / 展示資料 No.43 / 請求記号 VZ1-997) に出てくる、のっぽのジョン・シルバーという男です。これは非常に親切で愛情深い男であると同時に、残酷そのものの人間でもあるのです。つまり、善と悪とが渾然一体を成している、不思議で魅力的な人物です。こういうキャラクターは子どもの本には少ないのですが、悪漢小説の主人公たちは皆、非常にどぎつい個性を持っていて、それがまた魅力的なのです。そして、子どもの本

でも、魅力的で多くの人に読まれる作品は、やはりヒーローやヒロインが魅力的な人物であって、その人物がくっきりと立体的に、リアリスティックに書かれています。そのように書かれていて初めて、子どもも大人も楽しんで読むのですが、こういうものは案外少ないですね。純粹に子どもの本として書かれた作品の中では、手のつけられない悪者は少ないですよ。大抵、皆、最後に改心して善い人になる話が多い。

18 世紀から 19 世紀にかけて、イギリスの文学の中では、非常に個性的なキャラクターが時々ひょっこりと出てきていることがあります。良い悪いは別として、『北風のうしろの国』や『不思議な国のアリス』など、印象的で魅力的なキャラクターが何人かいます。『宝島』のロング・ジョン・シルバーは代表的な一人です。もう一人は、*Kidnapped* (『さらわれたデービッド』1886 / 展示資料 No.44 c. 1925 / 請求記号 VZ1-998) の中にチャンバラの名人であり、バグパイプの名手のアダム・ブレックという男が出てくるのですが、実に魅力的な男ですね。数は少ないですが、そういうキャラクターがいる。これは、案外そうした悪漢小説などの伝統があるのではないかと思います。

18 世紀のイギリス児童文学—子どもの発見—

そういった悪漢小説などが出ている中で、18 世紀の子どもの本は教訓主義時代と言われる時代を迎えていました。18 世紀になって初めて子どもに対する文学の必要性が、だんだんに分かってきて、そして、少しずつ人々が子どもの本を書いていくような

った証拠の一つです。

The governess, or, Little female academy (『少女のための小さな塾』1745／展示資料 No.2／請求記号 VZ1-410) という作品があります。作者のセアラ・フィールディング (Sarah Fielding) は女流の小説家でした。兄はヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) という、大変優れた小説を書いた人ですが、恐らく、そのヘンリー・フィールディングの教えを受けて、セアラ・フィールディングは子どものために *The governess* という本を書いたのだと思います。

この作品を知っている人にはちょっとうるさいと思いますが、これは牧師さんの未亡人が夫の遺志を継いで、子どもの教育に携わろうとして、確か11人の子どもを自分の家に預かって寄宿学校を開く話で、そこに出てきた子どもたちの、学校に来るまでのめいめいの生活を一人ずつが語るという、言わば、展覧会の絵のように、話をならべた作品です。キリスト教を基礎として、若い娘たちに礼儀作法、それから人として生きていく上での様々なマナーを教育し、必要な知識も伝達するというもので、一つ一つのエピソードが一つの物語になっている作品です。governess である先生の家に寄宿してということですから、ここに枠があって、一種の枠物語になっているわけです。セアラ・フィールディングは小説家だけあって、この作品はキャラクター一人一人が上手に書かれているので、お説教物語ではあるのですが読んでいてそんなに退屈はしません。当時この本を読むことができた子どもたちは、主として女性でしょうけれども、そんなにつまらなくなかったのではな

いかという気がいたします。しかし、はっきりと教訓の話です。

そして、レジュメでその次に来るもの、これは子どもの本ではないのです。ジョン・ロック (John Locke) の *Some thoughts concerning education* (『教育論』) は、非常に大きな影響を与えました。そして、もちろんフィールディングも、この『教育論』の影響を受けているのです。私たちが一番覚えておかなければならないのが、このジョン・ロックという人の、人間は生まれた時は白紙の状態である、その白紙の上に生活の中での経験がいろいろな物を書き加えていく、という考えです。これは当時、革新的な考えでした。と言いますのは、当時はまだ、人間は生まれながらに階級が決まっている。つまり、貴族は貴族として生まれる、それは神が定められたことと考えられていたわけです。しかし、ロックは、人間は生まれたときはゼロの状態であると言い、人間は全て神が定め賜うたものという人間観を全く変えたのです。この人間観は、当時の、例えば商工業者や農民、新しい自分たちの富を守ったり、生活を広げていったりしようとする中産階級—というのはこの時期なかったのですが—を形成しようとした人々にとって、非常に力強いものでした。つまり、自分たちが進歩・発展すれば、貴族にでも王様にでも、つまり何にでも変わっていけるという人間の可能性を示したわけで、このロックの思想は人間の歴史を大きく変えていくものでした。殊に、これは、子どもの文学を生む一つの起点となりました。例えば、召使いの子どもは生まれたときから最後までずっと召使いであるというのではなく、子どもというものは変

化・発展し得るということを示したわけですから、可能性を広げたという意味で非常に大きな役割を果たしたのです。子どもの文学が必要になるというのも、そうした人間観の上に成り立っているわけです。

さらに、この時期、大きな思想家だったのがジャン・ジャック・ルソー（Jean Jacques Rousseau）です。ルソーは空想的な古代のようなものを考えていたようです。つまり、古代において人間は全て平等であった、それが、時代が進むに従って不平等が現れて、現在に至っている、だから人間というのはあくまで本質的に平等でなければいけないという考え方で、これは非常に民主主義的な考え方です。また同時に彼は、子どもについても言及しています。彼は、10歳の初めくらいまでは、子どもに何の教育もするなと言っています。つまり、偏見を与えるな、子どもに備わっている理性が自然に芽生えて自分で判断ができるまで、子どもに教育をしない方がいいという考え方を持っていました。もちろん、その時期が来れば、子どもにいろいろな、いわゆる教育をしなければいけないという考え方が出てくるわけです。彼の思想に圧倒的な影響を受けたのが、トマス・デイ（Thomas Day）です。

The history of Sandford and Merton

『サンドフォードとマーтонаの物語』／展示資料 No.4／請求記号 VZ1-325) が展示してありますが、これは非常に長い話でして、3冊本になっています。1783年、86年、89年と、3年おきに、サンドフォードとマーтонаの物語を書いたのです。話を通じて子どもにルソーイズムを徹底して伝えるという物語で、3巻とも初めからおしまいまで、

べったりと教訓の話なのですが、面白いものもあります。これもやはり、ずっとエピソードの連続です。イソップから取った話や、イギリスやどこかの昔話から取ったもの、いろいろな逸話や昔話などを引用したりしながら、サンドフォードとマートンという二人の子どもを、ルソーイズムを基礎にして、教え育てていこうとしました。

トマス・デイは、富裕な紳士階級に生まれた人で、一時は国会議員になりました。当時としては最高の知識人ですが、この人も大分変わった人だったようです。当時は、紳士はこういう服装をするというように、全部決まっていた。しかし、彼は人間は平等であるというわけで、農民が着るような服を着てどこにでも行ったということです。

この長い三部作には、中には退屈なものもありますが、いくつか非常に面白い話があります。例えば、サンドフォードはふつうの農民の善い子で、マートンは豊かな商人の甘やかされた子どもなのですが、この二人が『ロビンソン・クルーソー』を読んで、自分たちも何か冒険をしようと言って、木から落っこちてしまったりする話があります。このような子どもの日常生活が書かれているような話を見ると、やはり子どもが書かれていて、そして、生き生きとした子どもがいるのだというのが分かります。こういう中で子どもの文学というのは着実に育っていったという感じがします。

18世紀は大体そういう時代なのですが、トマス・デイの作品も甲論乙駁（こうろんおつぱく）があり、彼の作品は非常に良い本であるという人と、もう教訓ばかりで少し面白くないという評価と、両方ありま

した。しかし、教会関係ではよく使われたらしく、縮められた本がだいぶ出ています。でも、この人の作品はアメリカンの宗派などの教えとは必ずしも一致しなかったところがあるのではないかなと思います。

トマス・デイの作品を非常に強く批判したのは、19世紀のイギリスの小説家ディケンズ（Charles Dickens）でした。ディケンズは、子どもの本の作家ではありませんが、彼が書いたものは子どもに読まれていますし、実際に子どものための本も書いている人です。彼は、トマス・デイの作品は非常にお説教くさい、どうにもならない、つまらないと言って、散々にけなして、こんな皮肉を言っています。「トマス・デイは、もし魔法のランプを手に入れたら、ランプの芯をきれいに切りそろえてから火を灯すだろう、そして、機械や何かについて大変詳しい人だから、彼が魔法の馬を手に入れたら、必ずその作られた魔法の馬の首の後ろにあるねじをしっかりと締めて、翼が開いて空を飛べないようにするだろう」。つまり、トマス・デイという作家は、かちかちの合理主義者、だからとてもつまらない人なのだと言っています。

ディケンズは、このような教訓小説を非常に嫌っていました。恐らく自分が小さいときに、散々に読まされた本があるのだと思います。確かに『オリバー・ツイスト』とか『デイヴィッド・コパフィールド』などを見ると、子どもの悲しみとか苦しみが、実によく書けています。つまり、ああいうものを書いたディケンズにとってみれば、トマス・デイのようにお説教するような人たちの作品は、つまらないものだったのだと思います。ディケンズは想像力という才

能をととても大事にしていました。彼は、空飛ぶ馬の首のねじを締めるようなことは想像力の欠如なのだ、子どもにとって一番大切なのは想像力なのだということを強調しています。

実際に、私たちが今ファンタジーとして読んでいるもの、楽しんでいるものを考えてみると、やはりファンタジーとかファンシーとかのもとになるのは、トマス・デイの作品とは違って、既定の事実を変えること、つまり、決まり切ったことを変えることです。何か現実ではないことが起こったりする、あるいは現実・常識であると思っただものを裏返してみる、つまり現実を変えてみるということ、それが一つ大きな要素としてあると思います。それから、あとは、退屈から逃げようとする気持ちというのか、それもファンタジーという作品にはとても必要なものではないかと思います。つまり、何かくさくさして、別なことを楽しみたいという気持ち、それから、やはり遊び心が、基本的にファンタジーにはなくてはならないでしょう。確かに優れたファンタジーには、私たちがその本の世界にいる限り、遊ばせてもらえるという力があります。

それからもう一つは、ビジョンを持つということ。こう言うと、ビジョンとは何かということになるけれども、これはいろいろな意味があります。例えば、未来を見通す力。またそれほど大げさではなくても、何か、空想とか幻想とか言われるものを持つこと。あるいはもっと思想的に、将来に対する考え、そういった精神の働きを持つということでしょう。やはり私たちの常識を破ってくれるようなイメージを持つこともあると思います。例えば「ハリー・ポッ

ター」(『ハリー・ポッターと賢者の石』)の最初で、学校へ行くのに、キングズクロス駅の柱の中にすーっと入っていくところがありますね。イギリスの駅をよく使う人は、「あ、そうか」と思う。あれは本当に不思議なイメージだなと思いました。ああいうものがあって初めて面白くなるわけです。

つまり、ディケンズという作家は、子どもがそうしたいろいろな空想や何かができる、別の未来像が描ける、そして、「今」から脱出しようとする意志が持てるようにする、そうした文学をこそ、求めていたのです。彼は、トマス・デイにはそれがないと言うのですが、必ずしも、そういうふうに決めつけてしまうことはできないのではないかと。トマス・デイの作品もよく読んで見ますと、なかなか面白いところもあります。

日本では、戦後一時期、童話が批判されたことがありました。今でもそういう批判をする人もいますが、童話には全く現実性がない、戦後の子どもにあのようなものを与えて、果たしてその子どもが未来像を持てるかどうか、という批判があったと思うのです。それでは、今、童話というものを読んでいて、全てが子どもに現実を教えず、未来像を持たせないのか。そのような作品もあると思いますが、そう多くはありません。

皆さん、まだ若い研究者が多いわけですから、申し上げておきたいのですが、文学史などで例えば 18 世紀は教訓主義の時代とレッテルを貼られています、本当に教訓ばかりなのかというと、具体的な作品を丹念に読んでみると随分違った顔がたくさん出てくるのです。一人の作家についても

そうです。ですから、やはり研究をする上で一番必要なのは、現物にあたるということだと思います。イギリスやアメリカの児童文学の研究をなさる人たちは、文学史などで一応概略を頭の中に入れたら、本当にそれは事実なのかどうか、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。つまり、概略の中では抜け落ちているものがたくさんある。その抜け落ちているものを拾い上げて、一種の新しい時代像というものを作っていくのは、個人それぞれの役割になると思うのです。

18 世紀が教訓主義時代と言っても、実際に調べてみると、言葉の使い方、数の数え方、それから人間が当然、どんな時代にあっても持っていなければならないマナー、例えば、人に対する思いやりというものがいろいろ出てきます。そうしたものは、必ず探すことができます。そうすると、一概に教訓主義時代と言ってしまうしないで、そこまでに、教訓があり、何々がありというふうに箇条書き的にその時代をとらえられるような、自分の文学史というものを作っていく必要があります。これはイギリスやアメリカの文学の研究だけではなく、一番必要なのは、日本の児童文学について、そうした目を一人一人が持っていることだと思います。一冊の本を読んで、世間的にはつまらないと言われていても、自分が読んで面白かったら、なぜ自分は面白いと思ったかというのを考えてみる。そこから自分の研究、あるいは本当に子どもに必要な本を見付ける力が生まれてくるのではないかと、という気がします。

今日はイングラムコレクションの話が中心なのですが、その前段として、18 世紀が

教訓主義と言われたこと、それから、子どもの文学が生まれてくる思想などをお話しました。こういうことも覚えておく必要があるのではないだろうかと思います。

教育・教訓主義から児童文学の黄金時代へ

ミセス・セアラ・トリマー (Sarah Trimmer) という教訓主義の代表的な作家が 18 世紀にいました。展示にあります、*Fabulous histories, or, The history of the robins : designed for the instruction of children, respecting their treatment of animals* (『たとえばなし - 子どもに動物の扱い方を教えることを意図した本』 / 展示資料 No.3 / 請求記号 VZ1-1055) も教訓主義の最たるものだと言われているものです。

この人の作品に『学習はじめのための寓話集』というのがあります。イングラムコレクションの中にありますが、*The Ladder to learning : a collection of fables* (請求記号 VZ1-1056)、「勉学への梯子 (はしご)」、「勉学への階梯 (かいてい)」とでもいうのでしょうか、fable (寓話) を集めた本で、小さい子のために一音節だけの単語を集めて寓話を作ったのです。さらにそれから、二音節だけの寓話、三音節の言葉が使える寓話を創作して、簡単な語から、だんだん難しい言葉を学んでいくのに、自分で寓話を作って教えているのです。これは非常に役立つだけでなく、作られた話が結構面白く良い寓話だと思います。ですから、この人は非常に優れた教育者であり、才能のある人で、*Fabulous histories* だけ云々して、このような作品を評価しないのは片手落ちになるわけです。

こういったものが積み重なって、初めて 19 世紀的な文学がイギリスで開花したと考えればよいかと思います。そして今見ると、やはり 19 世紀のイギリスの児童文学、殊に後半の児童文学はすごいです。豪華絢爛というような感じがします。ですから、この時期の研究をするというのは、それだけでも非常に魅力的な、そしてエキサイティングなことなのです。どれを見ても、皆面白い。それぞれに欠陥があったりしても、優れたものが山ほど出てきた時代というのは、やはりすごい時代だなと思います。

19 世紀—冒険小説の時代

イングラムコレクションに収められた作品が出来た 19 世紀のイギリス、殊に (19 世紀) 後半のイギリスは、何と云ってもヴィクトリア時代という政治的にも栄光に満ちた時代なのでしょうけれども、やはり文学が皆、光り輝いている感じがします。殊に冒険小説などは、典型的にそういう時代であったかなという感じがいたします。

レジュメにも出しましたが、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』から冒険小説が始まったと言われてます。確かにそれはそれでいいと思います。ただ、この本は原書でも長い本です。だから、イギリスの大学生でもデフォーの『ロビンソン・クルーソー』を、きちんとした形で読んでいる学生は少ないのではないかと思いますし、日本の英文科の学生もほとんど読んでいないのではないかと思います。翻訳でもいいですから、丸ごと読むのが面白いと思いませんね。

もちろん『ロビンソン・クルーソー』は

大人の本です。この本から冒険小説が始まっています。それから、ウォルター・スコット (Sir Walter Scott) の *Ivanhoe* (『アイバンホー』1820)。これも出るとすぐに子どもの本の本棚に入った作品です。それから、*The talisman* (『護符』1825)。これもそうです。それから *The Last of the Mohicans* (『モヒカン族の最後』1826 by James Fenimore Cooper)。この『モヒカン族の最後』はアメリカのロマンティズムの作家の作品ですが、これも *Leather stocking tales* (『革脚絆物語』) という 5 冊本の 2 冊目になっています。全部の和訳は私は知りませんが、『モヒカン族の最後』だけでも、すごく読み応えのある本だと思います。

この辺りは大人の本ですね。それと、先ほど申し上げた悪漢小説のグループとが子どもの文学、殊にイギリスの冒険小説の骨格をはっきりと作っています。代表的なものだけを挙げますが、*Masterman Ready, or, The wreck of the Pacific* (『老水夫マスターマン・レディ』1841/展示資料 No.37/請求記号 VZ1-720)。これはキャプテン・フレデリック・マリヤット (Captain Frederick Marryat) という人が書いた話です。この人の本は、必ず作者名に Captain (キャプテン) が付いています。海軍のキャプテン (将校) だったのです。*The pirate and the three cutters* (『三人の士官候補生』1881) という大人の本を書いたときに、Captain の肩書きを付け、それから海軍を退役しても、子どもの本では、ペンネームとして Captain を付けています。

Masterman Ready は長くて退屈な本です。でも、とても大事な本なのです。これ

は、子どものために書かれた冒険小説の最初の一冊と考えられます。マリヤットは『三人の士官候補生』で大変有名になり、「あなたの文体は子どもの本にふさわしい」というので、自分の子どもたちにどういふ本が読みたいかと聞くと、*Der Schweizerische Robinson* (『スイスのロビンソン』1812-3) みたいな話が読みたいと言いました。この作品は、1812年にスイスの作家で聖職者のヨハン・ダヴィット・ウィース (Johann David Wyss) が書いた作品で、日本では『スイスのロビンソン』という名前で出ています。非常に面白い作品で、イギリスでもすぐに翻訳が出て、子どもたちに熱狂的に読まれました。父親のマリヤットは、それでは『スイスのロビンソン』を参考にしようと思って読むのですが、間違いばかり書いてあると腹を立てたのです。そして、絶対に間違いのない『ロビンソン・クルーソー』(的な本) を書こうと思いました。それが *Masterman Ready* です。ですから、事実には正確に書いてあります。例えば、無人島に漂着して、いろいろな物を陸揚げしなければいけないときに、豚などの家畜を連れてきていますが、海に落とした豚がうろろうしている、フカ (鮫) が餌にしてみました。豚の腹にコルクを巻いてから海に落とし、沈まないようにしながら連れて行くというような細かいところまで真実味を出して書いています。これがつまらないもとなのです。つまり、子どもはハラハラドキドキしたいのですが、それをいちいち細かいところまで事実を並べられると、話がスムーズに進まなくてつまらなくなります。ですから、事実これは大変つまらない話です。

この作品は、もう一つ、18世紀的な子どもの本のパターンを踏襲しています。先ほど申し上げたトマス・デイの *The history of Sandford and Merton* で見るとマートンは甘やかされて悪い子で、サンドフォードは質実剛健な農民の勤勉な良い子どもです。このように二つの対比で話を展開させていくパターンが18世紀の教訓物語にあって、それを、マリヤットはこの *Masterman Ready* の中で、そのまま使っているのです。二人の兄弟の一人は老水夫の言うことをよく聞いて働く。弟の方は、次男坊というパターンどおりで、奔放不羈（ほんぼうふき）で親の言うことなど聞かないで勝手なことをしたがる。そのために悲劇が起きるのである。ある日、次男坊が水瓶の中に水を入れておく当番にあたっているのに、彼は水瓶を見て、まだ半分くらい水があるから明日でいいや、今日はいいだろう、と水を満すことをさぼってしまいます。ところがその日、原住民がやってきて彼らを囲み、弓と矢で攻めます。籠城中気が付いて水瓶を見ると、次男坊がさぼったために、水がなくなっています。そこで老水夫のマスターマン・レディが、原住民の弓や矢が飛び交う中、決死の覚悟で水を汲みに行くのですが、結局戦死してしまうのですね。つまり、水もなくなってしまうし、自分たちの指導者であった老水夫もいなくなってしまうという悲劇が起こる。かなり重苦しい出来事です。やはりお説教の物語なのです。でも、他に読むものがないから、子どもは読んだのだと思います。冒険の部分もありますからね。

結局、冒険小説も、もともとは18世紀的な教訓小説に悪漢小説にあるような波乱万

丈性を加えて始まっています。そして、また書く方も真面目ですよ。

確かにウィースはかなり間違っただけを言っているのです。例えば、南の島に漂流して、そこで暮らすことになるわけですが、食べ物や何かを見つけるために、子どもたちや大人たちが島を探検すると、遠くの方に大きな鳥のようなものが、走っていくのが見えるのです。それを追い詰めてみると、ダチョウなのです。ダチョウは、南海の孤島には絶対にいないのです。生息地はアフリカの南部です。マリヤットは、そういうところの間違いに腹を立てたわけですね。

ということは、当時は冒険小説の重要なファクターとして、真実味が要求されたということです。大人は多分そういった真実味のありそうな話を、これは間違いないと思って、子どもに読ませたのだと思います。だから、そのところは難しいですよ。子どもが喜ぶ本は、どの程度まで事実に基づかなければいけないか。どの程度ロマンティックな、ファンタスティックな出来事であっていいのかという問題。うそ八百ばかり並べれば、これはうそというのが子どもにも分かるわけなので、読まないのだと思うのです。いや、面白ければ読むか、その辺の適当さが必要なかもしれませんが、とにかくそういった風に、子どものための冒険小説は始まったわけです。

『宝島』以外で最も有名になった本の一冊は、バランタイン（Robert Michael Ballantyne）が1861年に書いた *The coral island : a tale of the Pacific Ocean*（『サンゴ島』1861／展示資料 No.39／請求記号 VZ1-101）だと思います。この本は、戦前の日本でもすぐに翻訳が出て、当時の子ども

もたちも喜んで読んだ作品ですが、確かにこれは面白いです。船が難破し、一『ロビンソン・クルーソー』と違って一3人のイギリスの少年が生き残って、絶海の孤島で生活していくこととなります。彼らはイギリスの少年らしく、正義を貫き、勇敢に己を律し、そして大胆な冒険にも少しもめげずに、三人三様の性格を発揮しながら、そこで自分たちの立派な社会を作っていきます。結局、一隻のイギリスの軍艦が彼らを発見し連れて帰るわけなのですが、ここには当時イギリスの少年はこうあるべきという、理想的な子どもが描かれていたと思います。結局、それが、1954年にウィリアム・ゴールディング (William Golding) の *Lord of the flies* (『蠅の王』1954) という作品でパロディーされることとなります。つまり、この『蠅の王』は、『サンゴ島』の3少年の話はうそである、あのロマンティックな冒険のうそを書いた作品なのです。これは非常にショッキングで、大変有名になった本です。

『サンゴ島』(日本では『さんご島の三少年』という訳があります)には、沈着冷静な少年、非常に冒険精神のある少年、それから冷静にいろいろなものを考える少年、3人のそれぞれ性格が違う子どもたちが出てきます。だから、この作品は心理学者の研究対象にもなっています。これは理想的なイギリスの子どもを書いたわけで、当時の子どもにとっては、自分もこうありたいと思うような少年たちの話でしたから、大変によく読まれたでしょう。そして実際、面白い話です。しかし、同時にまた、今の我々から読んでみると、『蠅の王』にパロディーされるようなものであったこともわかりま

す。この時代、つまり19世紀後半のイギリスの冒険小説は多かれ少なかれ、イギリスの帝国主義的な思想、考え方、それからジンゴイズム (jingoism) が流れていました。そしてもう一つは、形骸化されているけれども、とにかくキリスト教を中心とした西ヨーロッパ文明の輸出といったところがあります。そういった要素が非常にたくさんあるわけです。

このバランタインという作家は、非常にたくさんの作品を書いた人です。そして、彼は、当時本当らしさということが作品に要求されているということを知っていたのです。バランタインは大人のためにも冒険小説を書いていましたが、例えば、消防士について書こうとしたとき、ほんの僅かな間ですが、ロンドンの消防署で実習させてもらってから書いていました。つまり、19世紀のイギリスの冒険小説は、冒険精神や冒険物語の面白さ、プラス、イギリス主義と、キリスト教精神など、いろいろなテーマで書いている。そして、もう一つは地理・歴史的な真実や事実、そういうものを伝えるものだという目的がありました。地理的あるいは科学的な真実・事実が書いてあること、それが一種のお守りとなって初めて大人たちは安心して、子どもたちにそうした作品を与えたのです。

でも、先ほどの『スイスのロビンソン』—これはスイス生まれの話ですが—に見られるように、必ずしもこういった作品が真実を追究していたかということ、そうではありません。間違いはかなりたくさんあったのです。ですから、調べていくと、そういう話がたくさんあるのですが、しかし、一つだけ、科学的に精密で、しかも物語と

して面白い作品にジョージ・マンヴィル・フェン (George Manville Fenn) の *Nat the naturalist, or, A boy's adventures in the eastern seas* (『博物学者ナットー東洋海域での一少年の冒険』1899/展示資料 No.41/請求記号 VZ1-408) があります。これは傑作の一つと言われています。東洋の海域を舞台にしたものです。ナチュラリストのナットという少年が、太平洋にある一つの島を訪ね、そこで冒険と科学的な調査をしていく話ですが、この作家の作品は非常に信頼のおけるものであって、最も優れた冒険小説作家の一人と考えられます。この人の本は、他にも国際子ども図書館に入っていると思いますので、是非見てください。

そして、一番イギリス的であり、子どもたちを熱狂させたのは、ジョージ・アルフレッド・ヘンティ (George Alfred Henty) という人の作品だと思います。ヘンティはヴィクトリア期の最後、19世紀の末期になって出てきた人ですが、彼の作品はとにかく非常にたくさん出ています。

ヘンティは従軍記者として、実際にイギリスのほとんどの戦争に従軍し、それを自分の目で見ています。そして、それをもとにしていろいろな作品を書きました。かなりの数がイングラムコレクションの中にそろっています。私はこの図書館に最初に入ったときに、イングラムコレクションがずらっと並んでいるのを見て、非常に新鮮な驚きを覚えました。あれだけヘンティの作品がそろっているのは、ちょっとすごいです。1、2冊読めば分かりますが、パターンがあって大英帝国が必ず勝つのです。非常に好戦主義的ですが、しかし上手です。そして、一つ一つリアリティがあります。や

はり、たくさんありますから、是非これを読んでください。

この時代にはたくさんの冒険作家が出たわけですが、現在、こういった作家の中で偉大な作家というのは、やはりヘンティとバラントイン、そしてもう一人は、あまり読まれないけれども、*Nat the naturalist* のジョージ・マンヴィル・フェンではないかと考えます。この3人を、現在も多くのイギリスの文学史家たちは、この時代の偉大な3人の冒険小説作家と言っています。『宝島』が入らないのは、『宝島』は当時の子どものための冒険小説と違うからで、純粋に子どものために作品を書いた人たちといえ、この3人であるということです。それは大衆児童文学史というか、娯楽的冒険小説家としての偉大な3人であって、ヘンティにしても、バラントインにしても一フェンは、ほとんどそれは無いのですが、基本的には侵略主義的、帝国主義的なイギリスを土台としているわけです。そういった批判は受けなければならないのでしょうけれども、作家・作品として、やはりその3人辺りが一番すごい存在ではなかったかというのです。しかし、フェンの作品(『博物学者ナット』)が、イギリスの児童文学の作品の中でほとんど取り上げられないのは、非常におかしなことだと思います。この人の作品は今も十分読み応えがあると思います。少年が非常にリアスティックに、また、時にはユーモラスに書かれていて、とても読みやすく、よい作品です。今まで知らなかった人は読んでみるとよろしいかと思えます。キングストン (William Henry Giles Kingston) という人は、両手両足で書いたのではないと言われるくらいに、

たくさんの本を残した人です。

イギリスの 19 世紀の冒険物語の成立と展開と終焉、その中でも、少年小説の一つのパターンは十分に読み応えがあるものではないかなと考えております。

19 世紀の少女小説と女性作家

しかし、この時期はそれだけではなく、少女向きの話、あるいはリアルな話というものも結構あるのです。また私たちが忘れてはいけないと思いますのは、男性の作家が子どもたちの日常生活をリアルに描くという作品も、冒険小説の影に隠れて目立ちませんが、読むべきものはあまりないです。しかし、少女を中心にした作品の作家には何人か非常に優れた人たちがいて、研究すべき対象になると思います。男性向きの作品も女性向きの作品も、18 世紀の教訓小説などの影響を色濃く受けていることは間違いありません。

リアルな作品が一番影響を受けたのは、1740 年に出版されたサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) の *Pamela* (『パミラ』1740) です。これは、書簡体小説と言われています。書簡体とは、要するに手紙文で話がつながっているもので、読みやすい本です。この作品は、召使の少女が屋敷の御曹司から誘惑されるのですが、その誘惑をついに最後まで跳ね返して自分の操を守り、結局は改心したその御曹司の夫人になるという、美德の賜物の話です。これは実によく読まれていたらしく、その後も多くの作品に影響を与えています。『少女のための小さな塾』を書いたセアラ・フィールディングも、やはり、この『パミラ』を書いたリチャードソンの影響を受けてい

ます。フィールディングの兄にあたるヘンリー・フィールディングは、『ジョウゼフ・アンドルーズ』という有名な小説を書いた人です。このヘンリー・フィールディングとサミュエル・リチャードソンは、当時はライバル関係にあったわけですが、結局『ジョウゼフ・アンドルーズ』の方は少年の文学に、それから『パミラ』の方は少女・女性の文学にと、二人とも子どもの文学に多大な影響を与えたと思います。1740 年の *Pamela* に次いで 1855 年の *The heir of Redclyffe* (『レドクリフの世継ぎ』 by Charlotte Mary Yonge) という話も大人の本ですが若い女性たちが読んで涙を流し、当時のベストセラーになった本なのです。この作者ヤングは、もちろん子どもの本も書いていますし、それから、ジュリアナ・ホレイショ・ユーイング (Juliana Horatia Gatty Ewing) が *Six to sixteen* (『6 歳から 16 歳まで』1875/請求記号 VZ1-384) ほかを出しています。このユーイングという女性は当時、子どものために短編を書きました。そして割合と早く亡くなってしまおうのですが、非常に確かな筆の力でリアルに、少年たち、少女たちを書いています。家庭小説が多いのですが、当時としては大変読まれたと言われています。彼女の作品は、非常に文学史的に名高いので、今も子どもの本として出版されるということがあるのですが、あまり読まれないと言われています。作品は、非常に端正な、きっちりした英語で書かれています。今読んでみるとかなり退屈な感じがします。しかし、彼女の少女に対する観察眼、表現の方法、女性をとらえる目は、やはり非常に大きな影響を与えています。彼女は主として大人

が非常に高く買っており、ちょうど評判になっていた頃に亡くなったこともあって、当時の名声のまま文芸年鑑に名前が出ていたりするのですが、今読んでみると、それほどかなという感じがしないでもありません。

ユーイングよりむしろメアリ・ルイザ・モルズワス (Mary Louisa Molesworth) の *The carved lions* (『彫刻のライオン』1895) という作品が、16歳くらいの少女の成長の瞬間を書いていて、小説として非常に優れた作品であったかと思えます。ですから、この時期、女性向きにシャーロット・メアリ・ヤングと J.H. ユーイング、それからモルズワス、この3人あたりは、やはりこの時代が生んだ大変優れた女流作家であったと考えればよいかと思えます。

殊にモルズワスは、むしろファンタジーの方で有名になった人で、*The cuckoo clock* (『かつこう時計』) という作品があり、これは日本で翻訳されています。その *The cuckoo clock* が、なぜ歴史的に大変面白いかといいますと、日常生活の中に魔法が入ってくるという話は、どうやら彼女辺りが創始者になっているのです。彼女が始めたものをネズビット (Edith Nesbit) が世紀末から世紀の初めにかけて大々的に作品を展開して行って、ネズビットが作ったように考えられますが、実際はこのモルズワスが創ったのです。モルズワスは、他にも *The Children of the Castle* (『お城の子どもたち』1890) という作品を書いて、お城に住んでいる精霊のような少女と現実の子どもたちが交流する話などを、非常にソフトな文章でとてもよい雰囲気を書いていきます。ただ、強いていえば、少しセンチメン

タルな感じはするかなということはありませんけれど。この人はやはり19世紀の豊かな時代が生んだ、一人の偉大な作家ではなかったかと思えます。

あとは *Little Lord Fauntleroy* (『小公子』)、*A little princess* (『小公女』) を書いたバーネット夫人 (Frances Eliza Hodgson Burnett) が、良い仕事をしています。あれは今、どちらを読んでも面白いですね。バーネット夫人は、女性差別というのか、そういった時代の中で暮らしながら作品を書いていた人で、本当に子どもをよく知っていたというのが分かる作品が多いです。ですから、この時代、やはりよい仕事をした作家だと思えます。

昔話とファンタジー

ファンタジーについて、イングラムコレクションの中で一つ、私が知らせておきたいと思うのは、ジャンバティスタ・バジレ (Giambattista Basile) というナポリ人が収集した *The Pentamerone, or, The history of stories* (『ペンタメローネ (五日物語)』1634-36/展示資料 No.16/請求記号 VZ1-117) という英訳本です。この *Pentamerone* は子どもの本ではないのですが、日本でも完訳が出ていて読めるものです。1636年に出版されました。このフェアリーテイルなどをはじめとして、19世紀に、いわゆる文芸的なフェアリー・テイル (fairy tale) が始まっていくわけです。『ペンタメローネ』は、まだ収集したばかりの作品が並んでいて、ペローのように洗練しないまま出てきているので、かえってそれが魅力的な感じがするというふうにとってよるしいのではないかという気がします。

ヨーロッパでは、19世紀から、グリムが昔話を収集し始めたあたりから、昔話が活字化され本になっていくプロセスがあります。イギリスの子どもの文学を研究している人は、フェアリー・テイルがトラディショナル・フェアリー・テイル (traditional fairy tale) と、創られたリテラリー・フェアリー・テイル (literary fairy tale) の二つに分類されていて、トラディショナル (・フェアリー・テイル) は語りの文学として代々残されたもの、リテラリー (・フェアリー・テイル) は文章化したもの、あるいは一人の作家が創作した、フェアリー・テイルの形をとっているものと分類されていることは御存じだと思います。ある人は、とにかくフェアリー・テイルもフォーク・テイル (folk tale) も、文字化されたときにリテラリーになるのだといいます。つまり、文字化されたら、文字化されるにあたっての影響もあるわけで、純粋にオーラルではないというのです。

ですから、日本の昔話などを、巖谷小波さんが明治時代に日本昔話という形で文章にまとめたとき、小波さんは自由に再話したわけですが、そのために、本当にオーラルな正しい形の日本の昔話はめちゃくちゃにされてしまったのだというようなことを言う人もいます。それでは、巖谷小波さんではない他の人たちが一所懸命に聞き書きをした話はトラディショナルであってリテラリーではないかという、必ずしも

そうではないのではないかと、やはり一度文章化されたものというのは、文章の影響を必ず受けるのではないかとすることはあるわけですよね。そこを私たちは考えてみないといけないと思います。

文章化されたものは、手が増えられてアートフル (artful) になってしまったものだというふうに簡単に分けていいのかどうかということ、*Pentamerone*などを口にするとき、ふと考えてしまいます。

グリムが昔話を文章化する中で随分と改作したということは、既に有名な話になっています。文章化されたときに、やはり変化は起きているのではないかという気がしないわけでもありません。ですから、私たちは日本の昔話などを見ていく場合にも、そのことを絶えず頭の隅に置きながら考えてみる必要があるのではないかと。つまり、巖谷小波さんは勝手にやったから駄目、でも戦後に一生懸命やった他の人はきちんと聞き書きしているのでもいい、と、そう単純に分けていいのかなということ、考えたりします。

イングラムコレクションの話をしようにして、実際それをもっと中心にして話をしなければいけなかったのに、そもそもの初めから、まとまりのある話になりませんでしたね。しかし、私の話は一応これでおしまいにいたします。どうもありがとうございました。